

当院における認知症患者の BPSD 治療に対する抗精神病薬の種類と錐体外路症状の関係—特に、転倒、嚥下障害を指標として—

聖志会 渡辺病院

當山美奈子 認知症病棟看護師・介護士

【はじめに】

認知症の BPSD に対して、抗精神病薬が投与されることが多いが、その副作用に錐体外路症状があることが知られている。今回、我々は、全入院患者の服用している定型および非定型抗精神病薬の種類と転倒、および嚥下障害の有無に焦点をあて、調査し分析したので、若干の考察を加えて報告する。

【対象】

平成 23 年 1 月 1 日現在の認知症療養病棟 6 病棟の入院患者において、今回、認知症を認めた 302 名(アルツハイマー型認知症 217 名、脳血管性認知症 41 名、混合型認知症 7 名、レビー小体型認知症 7 名、ピック病 3 名、アルコール性認知症 27 名)の方を対象とした。平均年齢：79.1 才。HDS-R：測定不可、未施行もしくは 0～10 点 225 名、11～20 点 60 名、21～30 点 17 名。

【方法】

対象者の主病名、抗精神病薬の種類、HDS-R、嚥下障害・嚥下性肺炎の有無、転倒・骨折の有無を調査し、それぞれの関連性を調べた。抗精神病薬はクロルプロマジン換算をおこなった。嚥下障害の有無は、食事、特に水分にトロミをつけているかどうかで有無を代用した。転倒の有無は医療事故報告書を参考にし

た。

【結果】

認知症患者 302 名中、抗精神病薬を投与されているのは 144 名(非定型のみ 120 名、定型もしくは両方投与 24 名)であった。CP 換算では平均 49mg であった。現在、トロミを用いている患者は 73 名であり、このうち抗精神病薬を投与されている患者は 34 名であった。トロミの有無と抗精神病薬投与の間には、有意な関係がみられなかった (χ 自乗検定 $p=0.91$)。一方、調査期間中に転倒した患者は 63 名であった。このうち、抗精神病薬投与されている患者は 31 名であった。転倒の有無と抗精神病薬投与の間には、有意な関係がみられなかった (χ 自乗検定 $p=0.84$)。

【考察】

今回、認知症の BPSD 治療に用いられる抗精神病薬と嚥下障害、嚥下性肺炎、転倒、転倒による骨折の有無を調査したが、有意な関係は見られなかった。このことから、当院では抗精神病薬は、安全に使用されており、またこれらは適切に使用すれば、比較的安全であるものと考えられた。